

2009. 8. 20 (木)

徳島新聞

「きず・きずあと治療 最近の進歩」

公開シンポジウム「きず・きずあと治療 最近の進歩」が、第330回徳島医学会学術集会の一環として徳島市内の阿波観光ホテルで開かれた。5人のパネリストが、床ずれなどの傷や、糖尿病の足病変に関する最新の治療法を発表した。その中から、徳島大学病院形成外科の橋本一郎准教授による「けが、やけど治療の常識・非常識」と、きたしま田岡病院形成外科の松本和也医師による「床ずれの在宅ケア」の講演要旨を紹介する。

橋本 一郎准教授

「傷を湯につけると化膿する」「傷は乾かすと早く治る」という言葉をよく耳にするが、最近の研究で、どちらかというとケアは間違っていることが分かってきた。

これまでは、消毒によって創部を無菌状態にすることが大切とされてきたが、近年は、細菌の繁殖状態によっての汚染（細菌はあるが増殖はない）の生着

（増殖しているが無害）④ や軟こうが出てきている。感染（増殖している有害） 傷の状態に応じて、それらの段階で判断して、水 汚染や生着の段階では、水 による洗浄だけで十分だ。一方、傷を治すには、傷い傷や治りにくい傷は、病が自然治癒しやすい環境を整えることが大切。そのためには、体内の細胞が働きやすい温潤環境をつくる必要がある。近年は、過度な温潤状態を保つ創傷被覆材

温潤環境が治療促進



「浅めの傷は、清潔で適度な温潤環境を保つと最も早く治る」などと話す橋本准教授＝徳島市内の阿波観光ホテル

皮膚が温り皮膚が簡単に傷ついたりすることが原因で起る。

傷の深さによって治り方は違う。浅い床ずれの場合は、傷自体から皮膚が再生するので早く治る。しかし深い床ずれは、周囲に肉芽組織ができてから皮膚が再生されるので、時間や手間がかかる。そうならないためにも、早い段階で適切な処置を行うことが大切だ。

松本和也医師

床ずれは、圧迫やすれによって血流が止まり皮膚が壊死したり、汗や尿などで



床ずれの傷の治り方などについて話す松本医師

床ずれ防ぐ商品利用を

具体的な予防としては、体重が一方所に強くかかるのを防ぐ高機能マットレスの使用などが挙げられる。温り気を防ぐことも大切。最近では、軟便専用のインナーパッドなど、自立度に応じてさまざまなタイプのオムツが販売されている。また、皮膚に直接グレーして水をはいく商品もある。

床ずれなどの在宅ケアをできるだけ楽にするためには、こうした商品が欠かせない。購入する際の経済的負担を少なくするには、介護保険などの制度に対する情報が不可欠だ。ケアマネジャーなど在宅医療にかかわる関係者に積極的に相談してほしい。